テーマ展

絵で見る朝鮮通信使

会期：平成17年7月29日(金)～9月19日(月)
会場：佐賀県立名護屋城博物館企画展示室

Ⅰ　歴史の中の通信使

江戸時代以前の通信使（室町時代～安土桃山時代）

室町幕府が南北朝の合一を成し遂げた1392年、朝鮮半島では李成桂(イソンゲ)が朝鮮国を建国しました。朝鮮国が沿岸部で多発していた倭寇の取り締まりを室町幕府に要求したことがきっかけで、1404年に室町幕府と朝鮮国は対等な関係で国交を結びました。朝鮮国王から足利将軍に対する国書を携えて、朝鮮国から日本に派遣された使節団が「通信使」です。『通信』とは『信(よしみ)を通じる』という意味です。室町時代には、応仁の乱で足利将軍の権威が失墜する前に３回の通信使が来日しました。

安土桃山時代には、豊臣秀吉が国内統一を成し遂げた1590年と1596年の２度、通信使が来日しました。1590年は、秀吉の国内統一の祝賀を目的に、1596年は、文禄(ぶんろく)・慶長(けいちょう)の役(えき)(壬辰・丁酉倭乱、1592年～1598年)における講和交渉の中で、派遣された使節団でした。

江戸時代の通信使

慶長の役が終わった直後から、対馬島主宗氏は通商の再開を求めましたが、朝鮮国は拒否しました。その後、政権を握った徳川家康は、東アジアにおける国際関係の修復・安定を目指しました。また、江戸幕府(徳川将軍)の権威を高めるために、朝鮮国との国交回復を宗氏に命じました。

朝鮮国では文禄・慶長の役が終わっても、北方から他民族の侵入が続きました。その侵入を防ぎ、疲弊(ひへい)した国力を回復するには、日本と平和な関係を築くことが必要でした。そのため、戦乱中に加藤清正と講和交渉を進めた松雲大師(ソウウンデサ)[泗溟大師(シメイジョン)・惟政(ユジョン)]らを、探賊使(たんぞくし)として日本の国情を探るために派遣します。大師は、1604年に来日し徳川家康と会見した後、文禄・慶長の役で日本に連行された人々(1391人)の帰国を実現しました。その後、1607年に、使節団の派遣が再開されました。江戸時代初めの３回は、正式には日本からの国書への「回答(かいとう)」と、日本に連行された人々に帰国を促す「刷還(さっかん)」が来日の目的とされた回答兼刷還使(かいとうけんさっかんし)が来日しました。

４回目以後は、新将軍の就任を祝うなど、両国の交流を深める通信使となり、1811年までに、回答兼刷還使の３回も含めて、計12回の通信使が江戸時代に来日しました。

通信使一覧

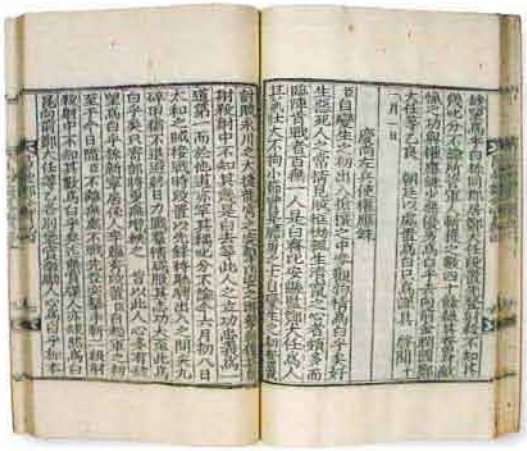
No.	西暦	朝鮮暦	日本暦	時代	将軍等	三　使	人員	朝鮮国側の派遣理由	備　考
1	1413	太宗13	応永20	室町	足利義持	朴賁		倭寇禁止要請、国情探索	正使発病、不実行
2	1429	世宗11	永享元		足利義教	朴瑞生・李芸・金克柔		将軍襲職祝賀、前将軍致祭	
3	1439	世宗21	永享11		足利義教	高得宗・尹仁甫・金礼蒙		交聘復す、倭寇禁止要請	
4	1443	世宗25	嘉吉3		足利義勝	卞孝文・尹仁甫・申叔舟	約50	将軍襲職祝賀、前将軍致祭	申叔舟『海東諸国紀』
5	1460	世祖5	寛正元		足利義政	宋処倹・李従実・李覲	約100	日本国王使への回答、大蔵経等贈呈	海上遭難、不実行
6	1475	成宗6	文明7		足利義尚	裵孟厚			出発せず
7	1479	成宗10	文明11		足利義尚	李亨元・李季仝・金許		旧好を修す	正使死去、対馬で中止
8	1590	宣祖23	天正18	安土桃山	豊臣秀吉	黄允吉・金誠一・許筬		国内一統祝賀、献俘答礼	秀吉、朝貢使招請指示
9	1596	宣祖29	慶長元		豊臣秀吉	黄慎・朴弘長	309	修好、日本軍撤退要請	冊封使に同行
10	1607	宣祖40	慶長12	江戸	徳川秀忠	呂祐吉・慶暹・丁好寛	504	対日友好保持、国情探索、被擄刷還	**回答兼刷還使**、国交再開
11	1617	光海君9	元和3		徳川秀忠	呉允謙・朴榨・李景稷	428	国情探索、俘擄刷還、対馬藩牽制	**回答兼刷還使**、伏見交聘
12	1624	仁祖2	寛永元		徳川家光	鄭岦・姜弘重・辛啓栄	460	将軍襲職祝賀、国情探索、俘擄刷還	**回答兼刷還使**
13	1636	仁祖14	寛永13		徳川家光	任絖・金世濂・黄呈	478	対朝鮮政策確認、国情探索、対馬藩主擁護、中国対策	柳川一件(1631～35) 馬上才初参加
14	1643	仁祖21	寛永20		徳川家光	尹順之・趙絅・申濡	477	友好保持、清朝牽制、国情探索	
15	1655	孝宗6	明暦元		徳川家綱	趙珩・兪瑒・南竜翼	485	将軍襲職祝賀	
16	1682	粛宗8	天和2		徳川綱吉	尹趾完・李彦綱・朴慶後	473	将軍襲職祝賀	
17	1711	粛宗37	正徳元		徳川家宣	趙泰億・任守幹・李邦彦	500	将軍襲職祝賀	白石、通信使諸式改変
18	1719	粛宗45	享保4		徳川吉宗	洪致中・黄璿・李明彦	475	将軍襲職祝賀	吉宗、白石改変を復旧
19	1748	英祖24	寛延元		徳川家重	洪啓禧・南泰耆・曹命采	477	将軍襲職祝賀	
20	1764	英祖40	明和元		徳川家治	趙曮・李仁培・金相翊	477	将軍襲職祝賀	
21	1811	純祖11	文化8		徳川家斉	金履喬・李勉求	328	将軍襲職祝賀	対馬交聘(易地聘礼)

※吉川弘文館『国史大辞典』の三宅英利執筆「朝鮮王朝通信使一覧」を基に作成。なお、人員は派遣母体である朝鮮国側の史料に基づく。

6　観感録　附東槎録(本館蔵)

17世紀後半～18世紀前半

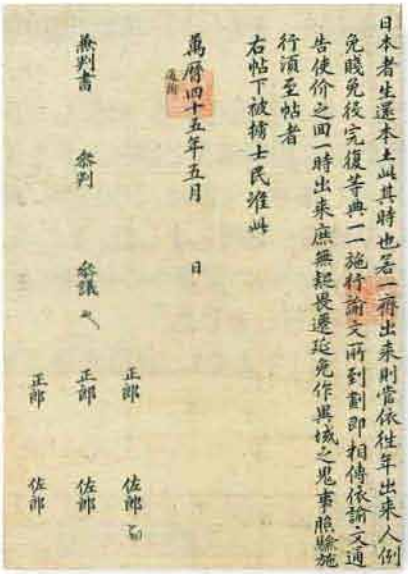
「観感録」は、朴毅長・朴弘長兄弟について、その子孫がまとめたものです。弟の朴弘長は文禄の役が終結していない1596(宣祖29・慶長元)年に、中国の冊封使とともに来日します。その際の通信使の副使として書き留めた日記が「東槎録」です。この時は、豊臣秀吉に日本軍の撤退を求めるのが目的でしたが、日本と中国との交渉が決裂したため、秀吉には会えずに帰国しました。

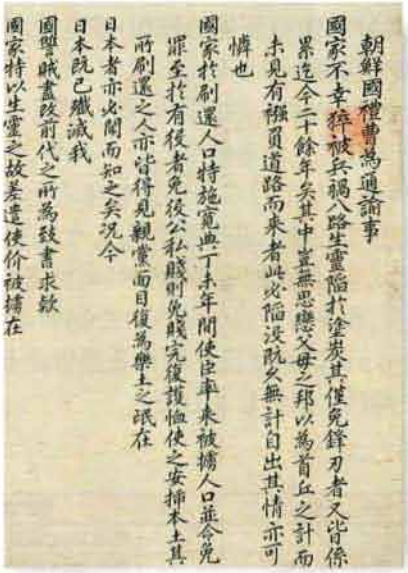


15　泗溟堂大師集〔松雲集〕(本館蔵)

17世紀

泗溟大師〔松雲大師・惟政〕は仏教の高僧であり、文禄・慶長の役で数千の僧侶を率い日本軍と戦う義僧将でした。1604(宣祖37・慶長9)年には日本の国情を探るため、「探賊使」として来日し、徳川家康と会見後、千人を超える人々の朝鮮国への帰国を実現しました。この本は彼の詩文集で、家康との会見の様子もうかがえます。





8　朝鮮国礼曹俘虜刷還諭告文(本館蔵)

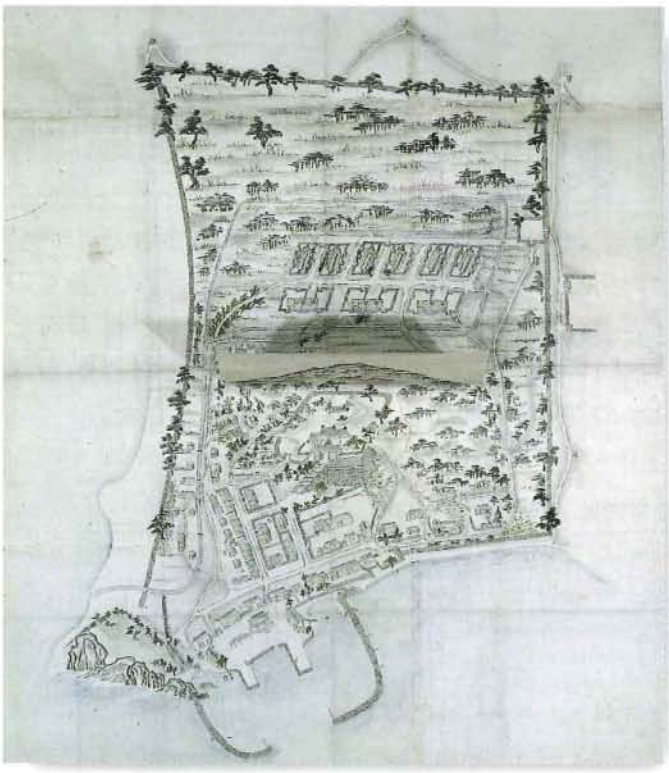
1617(光海君9・元和3)年

江戸時代の2回目となる1617年の使節団は、正式には「回答兼刷還使」と呼ばれ、文禄・慶長の役の際、連行された人々の帰国を促すことが重要な任務でした。この資料は礼曹(朝鮮国の祭司・外交などを掌握する機関)が日本へ連行された人々に発した諭告文です。「前回(1607年)と同じく、帰国者には特典を与える。互いに、この内容を伝えて帰国しなさい」と呼びかけています。

2・3　左より朝鮮国王李焞国書・徳川綱吉返書控[複製](藤井斉成会有鄰館原蔵、部分)

1682(粛宗8・天和2)年

江戸幕府は徳川将軍の権威を示すため、国書の交換を厳粛な儀式として行いました。この資料は江戸城で交換されたもので、江戸城内図書館ともいえる紅葉山文庫旧蔵と推定されます。朝鮮国王国書は白繭紙を用い、朝鮮国王国書専用の為政以徳印が2箇所に押されています。綱吉返書控は、金銀箔の鳥の子紙を用いています。いずれも、原資料は国指定重要文化財です。



11　草梁倭館絵図[パネル](長崎県立対馬歴史民俗資料館原蔵)

江戸時代中期～後期

江戸幕府は、対馬藩に日朝関係の仲介役を任せました。1609年に対馬藩と朝鮮国は通商に関する己酉約条を結びました。朝鮮国は釜山浦に建設した通商貿易場である倭館の使用を、対馬藩に認めました。この資料は対馬藩が1678(粛宗４・延宝６)年から1872(高宗10・明治5)年まで約500人の藩士・商人・職人を常駐させた草梁倭館の様子です。釜山龍頭山周辺の約33万㎡の広大な敷地には通信使の宿館や、２つの桟橋を持つ船江(船倉)などがありました。

10　三具足[複製]（万松院原蔵）

江戸時代

三具足とは、仏前に供える香炉・花瓶・燭台の揃いの仏具です。この資料は朝鮮国王から対馬宗氏に送られたと伝えられたもので、宗家の菩提寺である万松院に所蔵されています。万松院にはかつて４揃いの三具足があったことからも、室町時代から江戸時代の日朝関係において宗氏の貢献が大きかったことがうかがえます。

9　馬島以酊庵図(本館蔵)

1816(文化13)年

1631(寛永８)年、対馬藩主宗義成と対馬藩重臣柳川調興の対立から、柳川氏が宗氏の国書改竄を暴露しました(柳川一件)。江戸幕府はこれを機に、対馬府中(現在の対馬市厳原町)にある以酊庵に京都五山の僧を交代で駐在させ、朝鮮国との外交文書起草の任にあたらせました。この墨絵は北東側から以酊庵と府中湊を鳥瞰した図です。

1　朝鮮人参(本館蔵)

江戸時代

江戸時代、日朝貿易において朝鮮人参は中国産の生糸と並んで、日本の代表的輸入品でした。対馬藩に専売権が与えられたため、藩の重要な財源となりました。

しかし、徳川吉宗による朝鮮人参の国産化政策が成功すると、対馬藩の人参貿易は次第に衰えました。

12･13･14　享保丁銀･人参代往古銀[複製]･棹銅[複製]

(本館蔵･日本銀行金融研究所貨幣博物館原蔵･住友史料館原蔵)

江戸時代

朝鮮国への輸出品としては丁銀(右上３点)が過半を占めました。また、幕府は人参貿易のため往古銀(左上１点)も特鋳しました。銀に次いでは、銅が多く、棒状の棹銅(下２点)として輸出されました。

Ⅱ　通信使の旅

江戸時代の通信使は300名から500名で計12回来日しました(通信使一覧〔1ページ〕参照)。通信使一行の目的地は1617年の京都、1811年の対馬を除く、計10回が江戸でした(うち、3回については江戸到着後に日光東照宮に参拝)。一行は朝鮮国の首都漢城(現在のソウル)から江戸までを8ヶ月から10ヶ月かけて往復しました。釜山から大坂までは海路で、その後は陸路で江戸へ向かいました。通信使来日にあたって江戸幕府は威信を示すため、莫大な費用をかけて応接にあたりました。また、多くの藩が宿館での接待や道中での警備などを幕府から課せられました。そのため、通信使の来日は幕府と藩の財政を悪化させました。最後の通信使となった1811年は費用の節約などの理由から対馬から江戸までの行程を省き、対馬に渡海してきた幕府の使者との対礼「易地聘礼」の形で行われました。

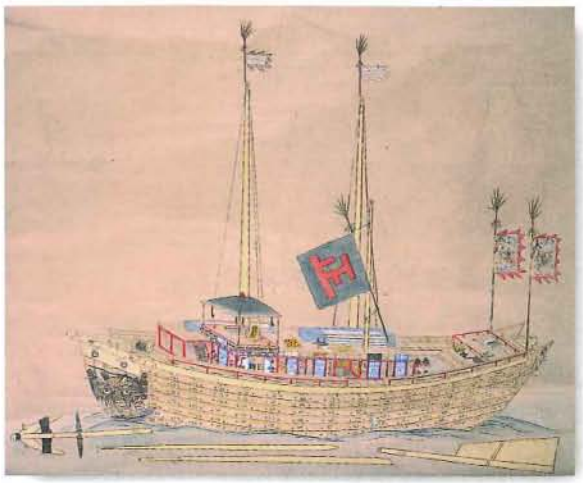
通信使の旅〔1711(粛宗37･正徳元)年の行程、●はおもな宿泊地、金指南「東槎日録」による〕

※『日本歴史展望』を基に作成

18　西国海辺船路之図（本館蔵）

1748(延享5)年

朝鮮国の首都漢城(現在のソウル)から、日本の大坂までの通信使の行程が描かれています。1596年と1643年の往路と帰路、そして1607年と1617年の帰路の計6回来航した名護屋も航路として紹介されています。



29　朝鮮通信使正使官船図(本館蔵)

江戸時代

通信使は釜山から大坂までは大型の通信使船6隻に分乗しました。これは正使(使節団の総責任者)が乗る正使官船の様子を細部まで記録した図です。中央に掲げられた「正」の旗や、船尾に描かれた絵が特徴的です。また、実際の航行時とちがい、船の下方に碇や櫓が描かれているところからも記録を重視したことがうかがえます。

23　朝鮮国対州有明山ヨリ遠見之図(本館蔵)　嶋田甚之丞筆　　1811(文化８)年

最後の通信使となった1811年に、対馬に渡海した嶋田甚之丞が島の南東部にある有明山(標高558m)から見た約100km先の朝鮮半島の様子を描いたもの。約200年前は現在と比べ空気が澄んでいたのか、現在は朝鮮半島との距離が約50kmの対馬北部からしか見えにくい山々も見えています。

22　対州御城下之図（本館蔵）
嶋田甚之丞筆
1811(文化８)年

嶋田甚之丞が1811年の対馬府中(現在の厳原町)での受け入れの様子を描いたもの。右上に宗氏の居城である桟原城があり、中央下の国分寺が「客館」(使節の宿館)とされ、左上の金石城(宗氏の旧城)には、「(幕府上使)小笠原大膳大夫(忠固)様御旅宿」の貼り紙があります。

21　文化八年朝鮮通信使行列絵巻(本館蔵、部分)　　1811(文化８)年

最後の通信使となった1811年の使節団は、対馬で江戸幕府の上使と国書の交換を行いました。この絵巻には179名の通信使一行(派遣人数は336人)と479人の日本人が描かれ、対馬藩をあげた通信使への応接ぶりがうかがえます。また、この時は使節団の中心といえる三使のうち従事官が来日せず、正使と副使のみが輿(カマ)に乗っています。

33　藍島図[複製]（岩国徴古館原蔵）
1748(延享５)年

藍島(現在の相ノ島)は福岡藩が通信使接待を行った島で、これは吉川領岩国(のちの岩国藩)の藩士が、上関での通信使接待の参考とするために藍島に派遣されて描いたもの。島の西側の長大な館群が通信使の客館です。東側には、客館より小さな家屋がいくつも描かれています。これは福岡藩の人員の宿舎と考えられます。

32　赤間関信使屋并近辺図[複製]（岩国徴古館原蔵）

1748(延享５)年

赤間関(現在の下関)の様子を描いた絵です。海上には、通信使船６隻と多数の長州藩の護衛船が描かれています。陸上には、三使が宿泊する阿弥陀寺(現在は赤間神宮)が右側に描かれています。しかし、図には人物が描かれていないことから、通信使接待の記録として岩国藩士が描いたものと思われます。

31　通信使船上関来航図[複製]
（超専寺原蔵）

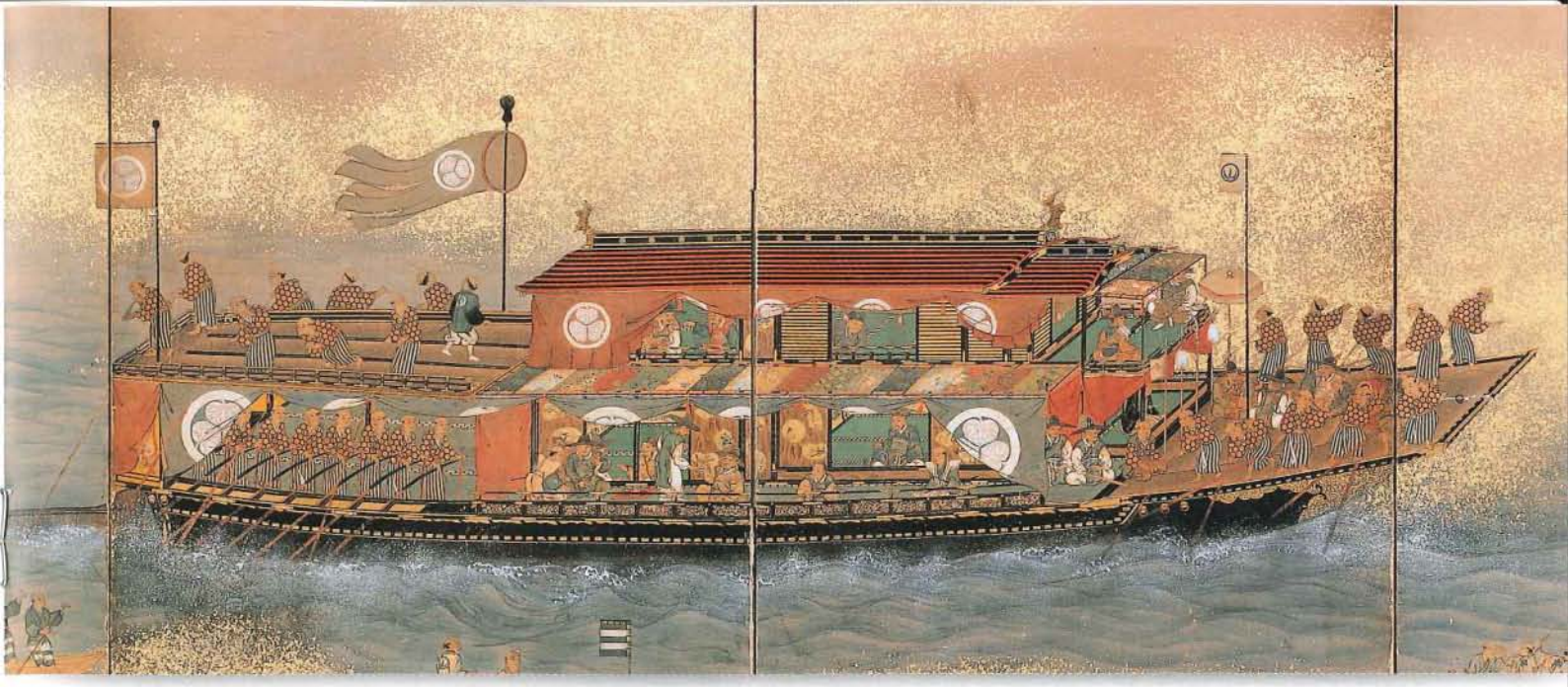
1821(文政４)年

山口県の南東部に位置する上関は瀬戸内海の難所の一つに挙げられるほど、潮流の流れが激しい所でした。この資料は、上関の対岸(本州側)から、通信使一行を迎えた上関の様子を鳥瞰した図です。この絵にも、６隻の通信使船と多数の護衛船が描かれています。左上には三使を接待する広大な御茶屋が、また、左下には本州側の室津が描かれています。

16　朝鮮人行列次第(本館蔵)

1748(延享５)年

通信使行列の見物のため、京都の菊屋七郎兵衛が出版したガイドブックといえるものです。以前の通信使や対馬などで得た情報をもとに編集されたものと思われます。



17　朝鮮通信使御楼船図屏風[複製](個人蔵、部分)　江戸中期

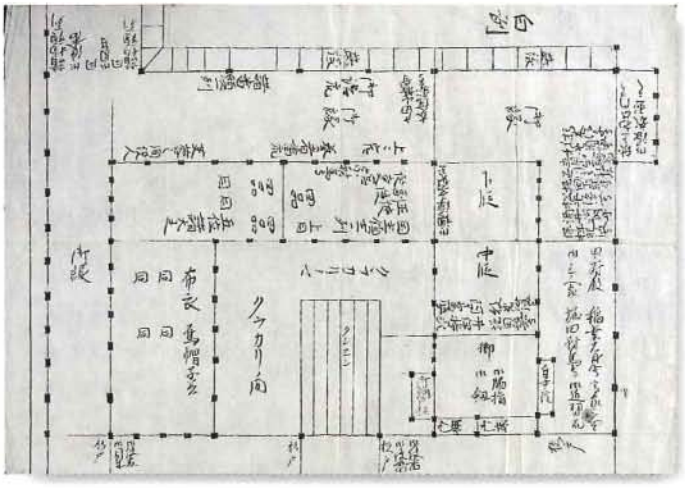
通信使一行は釜山から玄界灘と瀬戸内海を通り、大坂までは通信使船での旅でした。大坂から京都の淀(現在の伏見区)までは淀川をさかのぼるため、船底の浅い御楼船(川御座船)に乗り換えます。この御楼船は、徳川家の「葵」の紋から幕府の船と推定されます。大変豪華であるとともに、船頭たちが縁起がよいとされる亀甲模様が入った揃いの衣装を身に付けるなど、幕府の通信使に対する心くばりがうかがえます。

19　唐子人形（本館蔵）

外国人との出会いが少ない江戸時代の民衆にとって、通信使の衣装や楽隊の奏でる演奏はとても刺激的だったようで、その強い印象をもとに日本各地で唐子人形が製作されました。写真は滋賀県の小幡人形です。滋賀県には、中仙道と並行して約40kmの朝鮮人街道があります。この道は徳川家康が関ケ原の戦いの勝利後に京都上洛のために通った吉例の道で通信使には通行が認められましたが、大名行列には認められませんでした。

24　近江野洲村朝鮮通信使に対する課役免除口上書(本館蔵、部分) 江戸中期～後期

幕府や藩の威信をかけた通信使への接待は武士だけでなく民衆にも多くの課役として生活を苦しめました。この口上書は近江野洲村(現在の滋賀県野洲市)の庄屋が奉行所にあてたもので、江戸時代の中期から後期までの全７通が収められています。



27　天和二年通信使接迎席次図(本館蔵)　1682年

この図は、天和２(1682)年通信使の江戸城での将軍接見の席次図です。右下の「御」が５代将軍徳川綱吉を表します。その上には、「堀田筑前守」(大老堀田正俊)ら幕府の重臣が名を連ねています。中央には、「正使・副使・従事官」の三使や「宗対馬守」などが記されています。

Ⅲ　来日した人々と交流

朝鮮国政府は、毎回300～500名で構成される通信使に全国から医者・文学者・書道家・画家・音楽家・曲芸騎手など優れた才能を持つ人々を加えました。特に、医者・画家・曲芸騎手の派遣は、日本から朝鮮国に要請して実現しました。これは、朝鮮国の高い文化を日本に示すためでした。通信使が来日すると、各地で通信使の宿館に書や画を求める日本人が訪れました。特に、通信使が書いた書は人気がありました。また、楽隊が奏でる音楽に乗って進む通信使行列には、多くの人が見物に出かけました。江戸時代の「江戸山王祭」や「神田祭」では通信使行列を再現した唐人行列(当時の民衆は、外国人のことを「唐人」と呼ぶことがありました)も行われ、人気を博しました。

主な通信使構成員の名称と役割

名　称	役　割
正　使	使節団の総責任者。
副　使	正使を補佐し、事務を助ける。
従事官	道中の記録と国王への報告を行う。
製述官	文章の起草。漢文で筆談を行う。
写字官	書道が上手く、文を書き写す。
通　事	通訳。
医　員	医者。良医（使節団の主治医）は医術の交流も担当。
画　員	画家。
軍　官	使節団の護衛。
馬上才	馬上で曲芸乗りを行う。
典　楽	行進や宴会で使う音楽を担当。
小　童	三使や製述官に従い通訳・事務を行う少年。沿道での踊りの披露も行った。
吹　手	喇叭を吹く兵士。
清道旗手	「清道旗」の旗手。道の整理を行う。

34　朝鮮通信使行列絵巻（本館蔵）狩野常信筆

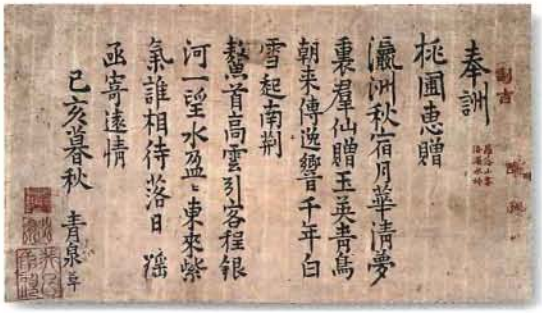
1704(宝永元)年～1711(正徳元)年

巻末に「法眼古川叟筆〈印〉」とあることから、幕府の御用絵師狩野常信の作品で、1682(天和2)年の通信使を描いたものと思われます。このときの通信使一行は475人でしたが、この絵巻には107人が描かれています。また、通信使一行に同行した対馬藩士と思われる日本人が136人描かれています。対馬藩は、幕府から通信使に随行し警護を行うよう命令されていました。対馬藩にとって、通信使は藩の重要性を幕府や全国の人々に印象づける絶好の機会でもありました。

46　朝鮮通信使行列絵巻　附「ちやうせん人ことは」(本館蔵、部分)

江戸時代中期～後期

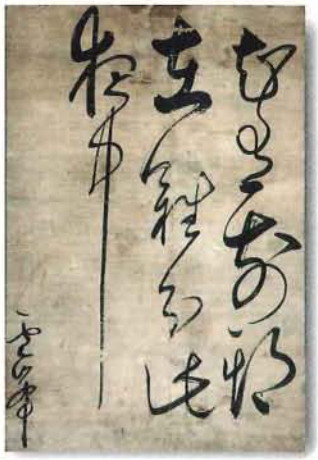
この絵巻は紙が大きく良質で、金粉も施されています。描かれた絵は写実的で躍動感があります。しかし、いつ来日した通信使を描いたかは不明です。作者も未詳ですが、優秀な絵師を雇用できる裕福な階層の注文で作成したものと思われます。また、巻頭には「ちやうせん人ことは(朝鮮人言葉)」と題して、日本語の韓国語訳が付いています。



36　朝鮮通信使製述官申維翰書(本館蔵)

1719(享保4)年

製述官は日本の文士との漢詩による交流を行うことが任務であったため、この職に就くのは高い教養と書の技の持ち主でした。この書は、1719年に申維翰が通信使の製述官として来日した時に、姫路藩士の河澄桃圃に贈った七言律詩です。江戸に対する期待と故国への思慕の想いが入っていることから、江戸に向かう往路で詠んだものと推定されます。



44　朝鮮通信使写字官金義信三行書(本館蔵)

江戸時代初期

写字官は日本人の求めに応じて書を書くのが任務です。この書には、唐の詩人である司空曙の「別盧秦卿(盧秦卿に別る)」という詩の前半部を見事な草書体で書かれています。

39　寿老図（本館蔵、部分）金有声筆

1764(明和元)年

通信使の画員(画家)として来日した金有声が日本で描いた絵です。財運・長寿の神として好まれた画題である寿老人を描いています。朝鮮絵画の特徴である白と黒との強い対比(コントラスト)がうかがえる作品です。

40　朝鮮紀聞（本館蔵）

江戸時代後期

1711(粛宗37・正徳元)年の通信使一行の衣服・楽器・輿・武器・馬上才などが、詳細かつ色彩豊かに描写・記録されています。

47　乗輿（本館蔵）

朝鮮時代後期

朝鮮国の特権階級である両班が使用した輿(カマ)です。通信使行列を描いた絵の中にも同じような屋根つきの輿が描かれています。

48・49・50　朝鮮半島に伝わる楽器（本館蔵）

通信使一行の楽隊がこれらの楽器を用いて奏でる音楽は日本人に人気を博しました。

ヘグム

ナガク

テピョンソ

43　馬上才図巻（本館蔵、部分）　江戸時代中期

馬上才(乗馬曲芸団)は、1636(寛永13)年の通信使で初来日しました。徳川家光は対馬藩主宗義成に馬上才の招聘を命じ、義成の交渉能力と朝鮮国側の日本への誠意を試しました。この絵巻は、1711(粛宗37・正徳元)年の通信使の池起澤と李斗興の妙技を描いたものです。

Ⅳ　今に生きる誠信の心

儒学者の雨森芳洲(1668～1755)は、1711(粛宗37・正徳元)年と1719(粛宗45・享保4)年の通信使来日にあたって、対馬藩の真文役(通信使に随行する通訳・秘書官)を務めました。芳洲は江戸時代中期の、通信使を朝貢使扱いする風潮を正すため、「朝貢するにあらず、ただ信(よしみ)を通じるのみ」と主張しました。また、「誠信の交わり」すなわち「誠実と信頼による真実の交わり」こそ朝鮮国との外交の基本であると説いています。彼の外交姿勢は、現在でも高く評価されています。

51　雨森芳洲画像[複製]
(芳洲会原蔵、管理団体:滋賀県高月町、部分)　江戸時代中期

芳洲は近江国伊香郡雨森(現在の滋賀県高月町)で医者の子として生まれ、18歳のときに江戸に出て木下順庵に師事し、22歳で対馬藩に仕えました。対馬藩では、政治・経済・文教・外交面で活躍しました。この絵は珍しい中国産の青檀紙に晩年の芳洲が描かれています。通信使の画員の作という伝えもあります。なお、原資料は国指定重要文化財です。

交隣提醒[パネル]
(芳洲会原蔵、管理団体:滋賀県高月町)　江戸時代中期

芳洲が対馬藩主宗義誠に対して、朝鮮国との外交について提言したもの。原資料は国指定重要文化財。最終章に「誠信の交わりと多くの人がいうけれども、その本当の意味は理解されていない。誠信とは実意と申すことであって互いに欺かず、争わず、真実をもって交わることである」としています。

出品資料一覧

	資　料　名	寸法（cm）	形態・数量	所蔵者(原蔵者)
Ⅰ	**歴史の中の通信使**			
1	朝鮮人参	14.8×5.5×3.0	木箱入薬包	本　館
2	朝鮮国王李焞国書[複製] ☆	53.4×124.6	一紙 1 通	本館（藤井斉成会有鄰館）
3	徳川綱吉返書控[複製] ☆	40.6×112.2	一紙 1 通	本館（藤井斉成会有鄰館）
4	8月14日付宗義成書状	17.0×97.0	一紙 1 通	本　館
5	対馬府中図屏風[複製]	88.5×182.3	屏風 1 隻	本館（東京国立博物館）
6	観感録附東槎録	38.0×22.5	書冊 1 冊	本　館
7	東萊府使書契・別幅	54.0×84.0	一紙 2 通	本　館
8	朝鮮国礼曹俘虜刷還諭告文	101.7×66.1	掛幅 2 幅	本　館
9	馬島以酊庵図	32.4×74.9	掛幅 1 幅	本　館
10	三具足[複製]	燭台高157.0	仏具 1 揃	本館（万松院）
11	草梁倭館絵図[パネル]	146.7×103.7	一紙 1 枚	本館（長崎県立対馬歴史民俗資料館）
12	享保丁銀	大9.4×3.3	銀銭 3 点	本　館
13	人参代往古銀[複製]	大9.4×3.3	銀銭 1 点	本館（日本銀行金融研究所貨幣博物館）
14	棹銅[複製]	長25.0	銅銭 2 点	本館（住友史料館）
15	泗溟堂大師集(松雲集)	19.2×30.0	書冊 1 冊	本　館
Ⅱ	**通信使の旅**			
16	朝鮮人行列次第	13.0×19.0	書冊 1 冊	本　館
17	朝鮮通信使御楼船図屏風[複製]	137.2×349.8	屏風 1 隻	本館（個人）
18	西国海辺船路之図	40.0×56.0	掛幅 1 幅	本　館
19	唐子人形	高10.0	人形 2 体	本　館
20	朝鮮通信使来聘記録	13.2×37.0	書冊 1 冊	本　館
21	文化八年朝鮮通信使行列絵巻	18.0×1351.0	巻子 1 巻	本　館
22	対州御城下之図	77.2×93.5	掛幅 1 幅	本　館
23	朝鮮国対州有明山ヨリ遠見之図	26.7×78.4	掛幅 1 幅	本　館
24	近江野洲村朝鮮通信使に対する課役免除口上書	30.0×830.0	巻子 1 巻	本　館
25	朝鮮人来聘対礼並余藻	24.0×16.8	書冊 1 冊	本　館
26	朝鮮通信使守山宿宿泊地絵図	30.3×350.0	巻子 1 巻	本　館
27	天和二年通信使接迎席次図	28.3×38.4	一紙 1 枚	本　館
28	朝鮮通信使来朝行列次第	26.4×18.3	書冊 1 冊	本　館
29	朝鮮通信使正使官船図	80.8×64.5	掛幅 1 幅	本　館
30	朝鮮人来聘行列	9.3×19.7	書冊 1 冊	本　館
31	通信使船上関来航図[複製]	90.0×110.0	掛幅 1 幅	本館（超専寺）
32	赤間関信使屋井近辺図[複製]	126.8×256.5	掛幅 1 幅	本館（岩国徴古館）
33	藍島図[複製]	72.0×102.0	一紙 1 枚	本館（岩国徴古館）
Ⅲ	**来日した人々と交流**			
34	朝鮮通信使行列絵巻	32.5×780.5	巻子 1 巻	本　館
35	朝鮮通信使画像	121.7×13.9	掛幅 3 幅	本　館
36	朝鮮通信使製述官申維翰書	29.4×51.8	掛幅 1 幅	本　館
37	朝鮮使節騎馬図	125.0×40.0	掛幅 1 幅	本　館
38	花鳥図	53.6×41.0	掛幅 1 幅	本　館
39	寿老図	94.2×35.6	掛幅 1 幅	本　館
40	朝鮮紀聞	27.5×19.5	折本 1 冊	本　館
41	文化度朝鮮通信使人物図巻[複製]	35.0×170.5	巻子 1 巻	本館（個人）
42	山水図	103.7×34.0	掛幅 1 幅	本　館
43	馬上才図巻	25.5×609.0	巻子 1 巻	本　館
44	朝鮮通信使写字官金義信三行書	67.9×42.3	掛幅 1 幅	本　館
45	朝鮮通信使行列図	129.0×53.8	掛幅 1 幅	本　館
46	朝鮮通信使行列絵巻　附「ちやうせん人ことは」	36.0×1052.0	巻子 1 巻	本　館
47	乗輿	88.0×99.0×122.0	輿 1 台	本　館
48	楽器　ヘグム	長69.9	弦楽器 1 点	本　館
49	楽器　テピョンソ	長33.2	管楽器 1 点	本　館
50	楽器　ナガク	長33.0	管楽器 1 点	本　館
Ⅳ	**今に生きる誠信の心**			
51	雨森芳洲画像[複製] ☆	75.2×43.2	掛幅 1 幅	本館(滋賀県高月町芳洲会)
52	橋窓茶話	17.8×26.9	書冊 1 冊	本　館
53	多波礼具差	18.1×26.1	書冊 3 冊	本　館
54	雨森芳洲書状	15.8×89.0	一紙 1 枚	本　館

☆　原資料は国指定重要文化財

※期間中一部展示替えをすることがあります。

【付記】

1　このパンフレットは平成17年度テーマ展「絵で見る朝鮮通信使」の解説書として、佐賀県立名護屋城博物館が発行した。

2　この展覧会の開催にあたり、次の方々にご協力をいただいた（順不同・敬称略）。記して深謝申し上げます。
　岩国徴古館、住友史料館、超専寺、東京国立博物館、長崎県立対馬歴史民俗資料館、
　日本銀行金融研究所貨幣博物館、藤井斉成会有鄰館、芳洲会(滋賀県高月町)、万松院

3　このパンフレットの執筆・編集は野田利男が担当した。地図については中山芳子がトレースした。

4　この展覧会の企画は、高瀬哲郎・蒲原宏行・浦川和也・安永浩をはじめ館職員の指導・協力を得て、野田が行った。

佐賀県立名護屋城博物館
Saga Prefectural Nagoya Castle Museum
〒847-0401　佐賀県唐津市鎮西町名護屋1931-3
TEL 0955-82-4905　FAX 0955-82-5664
(E-mail) nagoyajouhakubutsukan@pref.saga.lg.jp
ホームページ　http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/nagoya/nagoyaindex1.htm

●開館時間　9:00～18:00(入館は17:30まで)
●休 館 日　月曜日(休日の場合は翌日)
●観 覧 料　無料(特別企画展開催期間中を除く)

平成17年7月29日発行
編集・発行
佐賀県立名護屋城博物館
© 2005　佐賀県立名護屋城博物館